バイリンガル、認知的柔軟性と日本語の特殊性との関係について

1,　バイリンガルとバイカルチャー
２、バイリンガルの認知的柔軟性と状況適応スキル
３、日本語の特殊性
a,　言語音声と漢字の掛け合わせ
b,　日本語の環境への受容性の高さ
c,　表現の曖昧さ
d,　主語省略の傾向
e,　歴史的・地理的文化と結びついた日本人の好奇心や思考の柔軟性

４、結論　日本語特殊性と日本語バイリンガルの状況適応スキルの助長効力

バイリンガル、認知的柔軟性と日本語の特殊性との関係について

バイリンガルを一般的に定義すると、２カ国語を駆使し話す人、正確には、母国語を損なうことなく外国語である言葉を完璧に習得している人のことであるといえよう。

また、バイリンガリズムは、２つの言語構造に関わるだけでなく、高度にパーソナリゼされた２国の文化に深く関わります。その意味で、バイリンガルとは同時にバイカルチャーでもあります。バイリンガルの子どもは、家庭で習得する言葉を駆使しながら、二つの文化を自然に受け入れ、もう一つの国の祖父母やいとこたちなど親戚関係の繋がりを通じて、地理性をもつ人類全体への所属感を感じることで、また他の文化にも当然ながら開放的であるともいえましょう。

この観点において、バイリンガリズムをさまざまな観点から取り組むことができるでしょうが、ここでは、バイリンガリズムと認知的柔軟性について、中でもどちらかの言葉が日本語である場合について言及したいと思います。

まず、近年ますます見出されているバイリンガルの利点、なかでも認識柔軟性との関係について、いくつか取り上げますと、

一つめは、最近の多くの心理言語学の研究で、２カ国同時習得する子どもにとって特に多くの利点となる結果が発表されています。バイリンガルによって、子どもの脳への過重な負担を負わせるものではなく、むしろ、脳への刺激を良い方に活性させる。新生児には、違った言葉の２、３カ国語を保存し、互いの違いを識別し、習得できる素因を持っているからでしょう。

二つ目は、そうした研究では、バイリンガルは認識的な合同、協力作用や脳活動の柔軟性を助長するという幾つかの結果が出ている。つまり脳の一つのネットワークからいくつもの他のネットワークへと競合し、切り替えながら、抑制力、計画力、注意力、柔軟性、記憶力などの実行機能をアップさせたり、新しい状況に適応し、問題解決できたりと、より良いパーフォーマンスでなすべきことをやり遂げることができるのです。

例えば、バイリンガルの子どもは、大きなコミュニケーションスキルの感度を持っている。自分たちがいる状況を踏まえて、どの言葉を駆使するのか素早く対応します。
また、バイリンガルの子どもは一つのシンボルシステムから他のシンボルシステムに切り替えるのです。

したがって、バイリンガルの子どもは、一般的に談話的スキル、意味理解スキル、言語的スキル、さらに状況適応スキルと認知の柔軟性を高める能力といったコミュニケーションスキルを高める傾向があると言えましょう。

母親が日仏バイリンガル、父親が日本人の両親のもと、フランスに生まれた１０歳、１２歳のバイリンガルの兄弟等にインタビューしてみたところ、彼らは、日本語よりもフランス語の方が、論理的な思考や議論を組み立てがしやすいという回答があった。また彼らは、相手により、状況に合わせ、フランス語と日本語を自由自在に使い分けることができます。

では、日本語のバイリンガルと日本語の特殊性に関連して、日本語のバイリンガルの場合、状況適応コミュケーションスキルの助長効力が、より高いと言えるのであろうか。もうしそうであるならば、こうしたスキルは、脳の環境適応力の瞭然としたモデルとなろうと考えられます。

まず、言語学的には、日本語は平凡な言語であり、母音と子音の数が平均的で、単名詞と二重名詞の区別がなく、述語が動詞を最後に置く（S.O.V）という語順の特徴がある。 このタイプの言語は、世界の大半の言語に含まれています。

しかし、日本語では、ひらがな、カタカナ、漢字、アルファベットの4つの文字が混在して使われていることは、非常に大きな特徴です。さらに、日本語が他の言語と異なる点は、言葉音声と漢字を掛け合わせている音にあります。

このことを念頭に置き、日本語の特殊性をいくつか挙げてみたいと思います。

まず、言葉音声と漢字との掛け合わせについて、

言語は表音音声によって、思いや思考を伝達する目的で、生まれたものである。 言語の基本は言葉音声である。 千年以上前に中国から漢字が伝来するまで、日本語は表音文字だけだった。 そのため、現在私たちが使っている言語は音だけでは通用しない。 実際、同音異義語（同じ発音で異なる意味を持つ言葉）が非常に多いため、文字を見なければ正確に理解できないことが多い。 これは日本語の音の少なさによって説明できる。他の西洋言語が3,000以上あるのに対し、日本語の音節は100程度と非常に少ないと言われています。

二つ目は、日本語の環境への受容性の高さです。

言語というものは、私たちが最初に共有するものの一つであり、相合作用を通して学ぶものです。言語は単なる単語や文法規則の羅列だけではなく、言語において、この「相合作用」の概念は、不可欠のものです。それはまた、社会文化的な構成要素、コードや、取り扱うコンテクストに存在するルールなどのリストでもあり、共通の慣習によって結ばれた個人の共有体験に関連して現れるといえましょう。

地理的に見ても、日本列島は季節変動が激しく、安定した自然環境が望めない地域となっています。 この脅威的な環境が「他者」となり、日本人に適応を求める憂慮すべき役割を担っています。　これは、中国やヨーロッパのように、常に外部からの侵略にさらされるなかでの「他者」との交流が、多かれ少なかれ防衛的である国と異なります。
日本語が自然の変化に対する共生的な反応であるように見えるとすれば、それは、変化する自然の中で、相互作用がなされ、コードや共有される経験が絶え間なく構築されるというようなコンテクストが存在するからである。 この見方から、日本語は環境に対してより受容的であると言えるのではないでしょうか。

次に、表現の曖昧さが挙げられます。

対象相当てが自然である以上、必ずしも語彙だけでは説明できない感覚的なものがあります。
それは、語彙だけでは説明できるものではありません。 そのため、日本語の語彙には、明確に肯定するのではなく、相手に判断を委ねる曖昧な表現が多いという特徴があります。 「私は好きだけど、もしかしたらあなたは好きじゃないかもしれない」のように、
このように、最終的な判断を相手に委ねる曖昧な表現は、日本語の特徴ともいえます。
その結果、日常生活では言葉の裏にあるものをを読まなければならないことが多々あり、 そのためには、コミュニケーションの文脈を熟知する必要があります。 正しい気持ちを読み取るか、間違った気持ちを読み取るかなど、コミュニケーションのバランスを見極める必要があります。

そして、主語省略の傾向があることです。

日本語は動詞や形容詞を変えずに主語を省略できる言語です。
主語を省略できる言語はいくつかありますが、言文の一部を変える必要がないのは日本語だけだと言えるでしょう。

日本語の特徴は、上記で述べたように類義語が多いことにあります。
一人称の言葉には、「わたくし」、「ぼく」、「おれ」など同じ意味のものがあり、状況や相手によって使い分けられます。

最後に、このような日本語の特殊な特徴について言えば、特に、歴史的・地理的文化と結びついた要因が挙げられますが、そうした、脳の環境への適応力について付け加えておきたいと思います。これは、「島国」であるという事実と結びついた環境要因に関係していると言えましょう。
日本人作家の司馬遼太郎は、日本と世界との関係についての歴史的・文化的エッセイの中で、日本人の異文化に対する好奇心や思考の柔軟性がどのようにして生まれたかを述べていますが、 彼の発言は、私にとって、とても興味深いものに思えます。

司馬氏は、先進的な大陸文明は常に海の向こうからやってきており、 日本人は、歴史の中で、常に海外の文明に憧れてきました。 ただ「憧れる」だけでなく、外国の文化や思想を柔軟に取り入れ、「憧れ」を実践してきたのだとの見解を述べています。

漢字を採用したりすることで、より豊かで複雑な独自の言語を作り出したことは、こうした指摘をよく表しているように思います。
またそうした、日本人の柔軟性は、神道と仏教のシンクレティズムのような信仰の扱い方にも反映されているように思えます。

このような日本人特有の「好奇心」と「柔軟性」は、日本の歴史を通じて島国という環境の中で成熟してきたものであり、明治維新のようなある時期には、日本という国そのものの溢れ出るエネルギーとなり得るものでありました。そして、ここ数十年、日本は比較的閉鎖的な社会から、とても開放的な社会へと変化し、言語生活もより柔軟になってきております。

結論として、
昨今、世界はますますグローバル化し、私たち全員がプレーヤーとなる変革の世紀となっています。ユヴァル・ノア・ハラリ氏が、その著書のひとつである『21世紀のための21のレッスン」のなかで、これからの時代により必要となるものとして、「 精神的柔軟性と感情バランス」の重要性」（p.285）を指摘しているように、私個人的にも、精神的・認知的柔軟性が不可欠だと考えています。
日本の社会文化的相互作用の中で、このように構築された日本語のコミュニケーション的柔軟性が、日本人バイリンガルの認知的柔軟性をより強く育むとしたら、それは彼らにとってより大きな喜びとなるのではないでしょうか。